

(続紙 1)

京都大学	博士 (教育学)	氏名	春木 奈美子
論文題目	精神分析における4つのアポリアー他者、女、行為、症状ー		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は精神分析において出会われる4つのアポリアをめぐって書かれたものである。問題となるのは、「他者」「女」「行為」そして「症状」であり、これらすべては実際の臨床から独自の問題意識により切り出されたものである。</p> <p>手続きとしては、こうした問題を文学作品に描かれた特殊な状況へと反射させ、さらに、それらを哲学・思想的枠組のなかへと送り返しつつ考察が進められた。実際の臨床事例を引く際にも、フィクションを扱う場合と特別の区別は設けておらず、それは、臨床で実践されることと、文学で探求されるものの内奥には、言語活動における〈もの〉との不可能な交わりがあり、そこに姿を現すのが先にあげた4つのアポリアであるという着想がある。本論文の眼目は、こうした作業を通じて精神分析の新たな出口の可能性を展望することであった。</p> <p>第1章「歓待と他者」では、歓待という対峙的な事象のなかで〈他者〉に接近することを試みた。日本の民話『鶴女房』、川端康成の『眠れる美女』、そしてPierre Klossowskiの『歓待の掟』を、LévinasとDerridaを参照しながら、「歓待」の物語として読み解いた。それぞれ「歓待」の様式は全く異なるが、いずれの場合も、「歓待」は素朴な意味で成就されない。それは、〈他者〉の出現が同時に「歓待」の失敗を告げるためであった。〈他者〉との融合が望めない以上、「歓待」は失敗を運命づけられているが、そのような動きのなかにこそ、新たな主体の成立の条件を見出すことができると結論づけた。</p> <p>第2章「女たちの余白に」では、男性との関数では算出されない〈女〉、Lacanの言を借りれば「存在しない〈女〉」を、いくつかの事件・出来事のなかに発見することを試みた。考察の対象としたのは、Marguerite Durasが描く二人の女、Euripidesのメデア、そしてAndré Gideの妻Madeleineである。Durasの小説に登場する〈女〉の不可解な行為のうちに、言語と引き替えに喪失した〈もの〉へ向かう不可能な欲望が、享楽として成就する瞬間を掬い上げた。また、こうした不可能な審級を出現させる〈女〉の行為として、メデアによる「子殺し」とMadeleineによる「手紙の焼却」を構造的に読み解いた。こうした〈女〉のあり方は、破壊的ではありながらも、狂気の縁で主体を世界につなぎとめる積極的な面をあわせもつことを指摘した。</p> <p>第3章「行動の条件としての行為」では、佯狂ハムレットが仕掛ける劇中劇における「演技」にはじまり、漁色家ドン・ジュアンの「証書」たる女のリストにいたるまで、さまざまな「アクト」を取り上げながら、行為の審級を行動とは区別して定義することを試みた。これは同時に「行動化」と「行為への移行」という概念を分節化する作業でもあった。Lacanが(表象の)舞台からの落下と定義した「行為への移行」は、もちろん臨床においてある種の危険をはらむものであるが、それが舞台そのものを可能にした〈もの〉の側への回帰であるとすれば、同時に主体の更新の可能性を秘めた開かれでもあることが示唆された。</p> <p>第4章「固有名と症状」では、Freudが捉えた症状の二層性を、言語学のアポリアである「固有名」の問題系と重ねて検討することで、完全な消去は望めない〈症</p>			

状)のトポスに迫った。考察の対象としたのは、**Dolto**の二つの症例と、筆者が提示する「葬儀で署名できない女性の症例」であった。「固有名」を欠いた主体、「固有名」に縛られた主体、彼らが一様に示すのは、名指しという行為が主体の形成にいかに深く関わっているかということであった。本論文では、個人から切り離し可能とされている症候と個人と解きがたく結ばれた〈症状〉の関係を、言語学における記述説と反記述説の関係に重ねつつ考察することで、〈症状〉が担いする名指しの機能を明らかにした。そうした「名指しとしての症状」は、もはや「主体の症状」ではなく、「主体が症状である」と言えるような存在様式、すなわち、**Lacan**がサントームという用語によって指し示した、〈症状〉を通じて世界につながる主体のあり方であった。

第5章「ある事例に寄せて」では、ひとつの自験例を詳細に吟味した。これは、「贈与」や「性」そして「行為」や「固有名」の問題がポリフォニックに鳴り響くこの症例を通じて、第1章から第4章までの考察が具体的にどのように展開するのかという臨床的応用の作業でもあった。最後に、症候の消去に邁進するアプローチとは区別して、個別的な主体の本質をなすものとしての〈症状〉に場所を与える精神分析の立場を明確にした。

以上の考察により、欠如の受入れからさらに一步踏み出した主体のあり方を提示し、精神分析の出口の新たな可能性を展望した。今後の課題は、こうした可能性が実際の臨床においてどのような射程をもつのかを明らかにすることであることを確認した。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせて、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入するときは、400～1,100 words で作成し審査結果の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、その題目に示されている通り、精神分析の4つのアポリア、すなわち、「他者」「女」「行為」「症状」について論考したものである。

言うまでもなく、精神分析において、その「アポリア」と位置づけうる主題がこれら4つに留まるわけではないが、これらは筆者自らの臨床経験におけるクライアントとの出会いに由来するものであり、この点にも、単なる哲学的・理論的な論考を超えようとする、著者の心理臨床学的な志向性が明確に示されている。

そのような本論文において高く評価できるのは、以下の4点である。

第一に、第1章に最も端的に示されているが、精神分析学や臨床心理学のみならず、哲学・文化人類学・言語学に至るまで幅広い文献を読み込み、時に及んでは原文にも当たり、説得力ある論を展開している点が挙げられる。第1章では、文化人類学の領域で多く議論されてきた「歓待」が主題として取り上げられており、考察の対象とされた素材も、日本の昔話の「鶴女房」、川端の『眠れる美女』、Klossowskiの『歓待の掟』と多彩である。そこでは、LévinasとDerridaを参照しつつ、それらを解釈することを通し、「歓待」の孕む①襲来性、②従属性、③匿名性を明らかにし、〈他者〉との真の意味での「融合」は果たされえず、その意味では「歓待」は最初から失敗が運命づけられており、しかし、その「歓待」の失敗によってはじめて立ち上がるという主体の在り方が明示されている。特に、「鶴女房」の主人公が「見るなのタブー」を破る場面を、Lévinas 的な「顔」の現出としてとらえ、“無条件の歓待における最も重要なモーメントである〈他者〉の剥き出しの出現”として描出しえた点は非常に高く評価できる。

第二は、第2章にとりわけ特徴的だが、小説や物語という素材を通して、Lacanの「対象」「欲望」(言語による)「主体化」「女なるものは存在しない」といった概念やテーゼを丁寧に解説し、かつそれが単なるLacan理論の上塗りには留まっていないという点である。例えば、第2章の前半では、Marguerite Durasの小説『ロル・V・シュタインの歓喜』が取り上げられているが、そこで強調されているのは、「見る主体」ではなく、「見られる主体」である。自らが欲望する対象(自身の存在の意味)を見出しえない主体は、〈他者〉の眼差しを頼りにそこから照射されるものを対象として把握するゆえ、そこでの主体は何よりもまず〈他者〉に見られており、遅ればせながらその対象を見ているにすぎない、つまり、“主体は見るよりも前に、見られている”と著者は論じるが、このようなスタンスは、Lacan(特にその前期思想)だけに留まらず、近代的な自我を前提とし、あえてそれをどう脱構築するかという、広くフランス現代思想の文脈でこのテキストを読み込もうとしたものとして評価できる。また、その後焦点が当てられる、同じDurasの小説『破壊しに、と彼女は言う』のアリサの言動、Euripidesのメデアの「子殺し」、そしてAndré Gideの妻Madeleineの「手紙の焼却」を構造的に読み解くことで、精神分析における「症状としての女」というテーマを浮き彫りした。さらには、こうした〈女〉の在り方を、破壊的ではありながらも、狂気の縁で主体をつなぎとめる積極的な面を併せもつことをも指摘し、精神分析における新たな可能性を展望しえたこともたいへん意義深い。

第三は、第二の評価点とも深くかかわっているが、Lacan理論のなかで、それぞれ別の位相をもつものとして認識されつつも、その区分が明確ではなかった「行動化」と「行為への移行」、さらに「症候」と「症状」の差異を、心理臨床実践における自験例も含めた、具体的な素材を通して明らかにした点である。

(続紙 4)

第3章では、Lacanの「行動化」と「行為への移行」を、身体と主体の関係性から分節化することが試みられている。このような分節化により、ハムレットが陥る困惑の瞬間に見られる「行動化」と「行為への移行」との交錯を見事に捉え、ドン・ジュアンが「石の客人」から、この時ばかりは、自らが「お手を」と求婚されることで、その「舞台から落下する」様、すなわち、「行為への移行」の瞬間を描き出すことが可能となった。心理臨床実践においては、これら「行動化」と「行為への移行」との区別は非常に重要であり、それまで自らがいた「舞台からの落下」である「行為への移行」は、確かに危険をはらむものではあるが、新たな主体の可能性の開けとして理解すべきであることが示唆されており、この点も高く評価できる。また、第4章では、「症候」と「症状」の違いが、Lacanの「サントーム」概念によって論じられている。心理臨床実践で出会う「症状」は、単なる「症候(サイン)」ではありえず、「名指しとしての症状」である。本章では、Françoise Doltoの二つの症例と、自験例である「葬儀で署名できない女性」を通して、個人から切り離し可能な「症候」と、個人と不可分に結びついた「症状」との関係性を、言語学における記述説と反記述説の関係にも重ね合わせつつ考察することで、「症状」が担いする名指しの機能、すなわち、“「症状」を通じて世界につながる主体の在り方”を明確化しえたと言えるだろう。

第四は、最終章である第5章において、一つの自験例を詳細に吟味することで、ここまでに論じられてきた「他者」「女」「行為」「症状」の個々の問題が、「子ども」という「存在しない審級」をめぐる一連の「問題系」として描出しえた点である。クライアントからの申し出によって終了することになった、セラピストにとって課題多き事例ではあるが、一つの臨床事例のなかで上記の「問題系」がいかなる具象性をもってクライアントによって呈示されるのか、そしてそのような「問題系」がセラピストによって実際にいかにして読み解かれるのかを明示できたという意味で高く評価できる。

試問では、Lacanの論と自らの論との線引きが若干曖昧である点が指摘され、精神分析というより、やはり哲学的方法論による論文ではないかという疑問も呈されたが、著者がその際応答していたように、「精神分析的方法論で論文を執筆する基盤」とも言える本論文にとって、それらの指摘は、今後著者が精神分析の実践経験を積むことで、ここで得た着想をより発展させ実り豊かなものとしうる可能性を示唆したものであり、本論文の価値を些かも損なうものではない。

よって、本論文は博士(教育学)の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成25年7月4日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定)当該論文の全文に代えてその内容を要約したものと認める。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降